

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成28年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を
目的として、平成 29 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した
者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	柳 信愛
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第16号
学位授与の日付	平成29年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	日本語指示詞の習得に関する研究 －韓国語学習者が習得過程で形成する 「中間言語」を中心に－
論文審査委員	主査 教授 由井 紀久子 副査 教授 中西 久実子 副査 准教授 堤 良一（岡山大学）

論文内容の要旨

日本語指示詞は、日本語学習者にとって習得上の問題が出やすい文法項目である。それは、言語構造が類似している韓国語を母語とする人にとっても同様である。本博士論文は、韓国語母語日本語学習者が指示詞を習得する過程について多角的にデータを収集し、多元的に分析したものである。

第1章は序論として、研究の背景、研究目的と論文全体の概要を述べている。研究目的では、母語の干渉や母語に影響されない中間言語といった特定の立場に立つことを批判し、多角的・多元的に分析する必要性を主張している。

第2章から第4章を第1部とし、先行研究と研究方法の概要をまとめている。第2章では、まず、日本語指示詞に関する研究を佐久間鼎から始め、談話管理理論に至るまで概観し、現場指示・非現場指示に分ける研究から統合的に扱う研究の流れを示している。続いて、日韓指示詞の対照研究を取り上げ、3系列という共通点と用法レベルでの違いを提示している。第3章では、第二言語習得に関する研究を取り上げている。対照分析、誤用分析、中間言語の順に研究を紹介している。続いて、指示詞の習得研究について安と迫田の成果を中心に述べ、続いて本論文筆者である柳の研究を提示して、自らの研究の立場を説明している。第4章は、調査方法と調査構成である。研究課題は、次の4課題である。(1) 韓国語母語話者学習者の指示詞習得状況を明らかにする。(2) 韓国語学習者の指示詞習得過程に影響を与える要因について具体的に明らかにする。(3) 韓国語学習者による目標言語と母語の関係を明確にする。(4) 指示詞の習得過程で形成される韓国語学習者特有の「中間言語」を明らかにする。

第2部は、第5章から第8章までで、第5章「韓国の日本語教材における日本語指示詞」、第6章「日本語指示詞の習得過程に関する量的調査」、第7章「日本語指示詞の習得に関する質的調査」、第8章「結論」という構成である。第5章では、韓国語の高校、大学、その他の研究機関で使われている教科書15点の指示詞の説明記述をデータ化している。これは、習得過程において、教科書で習ったことが異なる用法の指示詞使用の際にも影響していることがこれまでの研究から推察されるからである。教科書の多くが、日本語の指示詞の説明について、対応する韓国語の指示詞と併記した表等を載せているだけで、

詳しい説明はあまりないということが分かった。

第6章は、韓国人学習者を対象としたアンケート調査の結果に基づく議論である。調査の内容は大きく2つに分けられており、第一は韓国の日本語教材に載せられている指示詞の文を用い、レベル別のどのように習得されているかを、現場指示6項目と非現場指示4項目の合計10項目で調べたものである。第二は、「コ・ソ・ア」の使用上の認識について調査している。日本語の指示詞を使用する際、どのような基準を使っているか、「韓国語」「日本語」「教師と教材から習った内容」を提示し調査している。第一の結果から明らかになったことは、「コ・ソ」「ソ・コ」の対立型の習得はレベルを通して進んでいたこと、現場指示の融合型では、特に「コ・コ」「ソ・ソ」のように同一の指示詞を使用する用法に対して違和感を持つ人がどのレベルでも多いこと、「ア・ア」の場合は全レベルで習得が進んでいたこと、「独立話題指示」のア系列の文ではレベルが上がるにしたがって徐々に正用が多くなるが現場指示より習得が進んでいないこと等である。第二の結果からは、使用に際しての判断基準は、「韓国語」「日本語」「教師や教材から習った内容」のどれか一つではなく、複合的に考えていることが明らかになった。また、すでに習った説明だけでは不十分だと考えていること、直感的に判断して使用していること等が明らかになった。

第7章では、指示詞習得に影響を与える要因が様々であることを受け、質的に詳細を明らかにすることを目指してインタビュー調査を11名に対して行っている。中間言語の形成を探るべく、「母語と目標言語の関係」「指示詞の習得状況」「指示詞使用に対する認識」の3点に注目した。その結果、学習者は母語と目標言語を分離して考えるために努力していたこと、しかし、初級段階で習得を進める役割については、母語に対して肯定的であったこと、初級段階で習得した指示詞が中級段階以降に影響を与えること（「指示詞用法間の影響」）、特に教科書に載せられている「コ・ソ」「ソ・コ」の影響で同一の指示詞が続くと違和感を持つこと、直感文に対する親密性と話す際の気持ちなどを基準としていること等が分かった。

第8章は締めくくりとして、「中間言語」に対する筆者の考察を述べている。中間言語は母語にかかわらず発達する学習者の言語体系という立場の研究が多いが、母語によって違う中間言語が形成されるというものである。本研究で明らかになった「指示詞用法間の影響」に注目すると、母語では説明できない要因があるとしている。この問題についてはさらなる研究が必要であると考え、今後の課題としている。

口述試問及び審査結果

まず、字句や文法に関して修正が必要な箇所が多すぎることが指摘された。審査を受ける立場であることから丁寧な推敲が望まれる。字句等の修正は、修正期間に徹底的に行うという意思が確認された。次に、参考文献リストの不備も指摘された。書き方のスタイル上の問題のほか、研究テーマに関する先行研究の網羅性が十分とは言い切れないことが審査員より問題として提示された。この件も修正できるものは修正し、さらに漏れている文献を調べるという回答を確認した。

本研究の問題意識は明確で、研究課題もよく練られており、調査もそれを解明するためにデザインされていることは評価できる。しかし一方で、分析や考察の記述において、調査協力者の発話そのものを抽出された概念としてしまっており、専門用語の概念で捉えなおしていない箇所があることが惜まれるところである。これについて、自論は述べたものの、説得力をさらに上げることが期待される。例えば「直感」が自動化した知識なのか、潜在的知識なのか等、専門分野で議論されている概念との関係性をより明確に述べる必要がある。

別の審査員からは、本研究が目指している方向性について確認する質問がなされた。学習者の習得し

た指示詞の何を明らかにしようとしているのか、言語使用の際のモニター機能の内実なのかという点である。この件に関しては、その通りだという回答であったが、さらに詳しく追加説明ができる余地が残されていた。また、先行研究を使って、指示詞用法の枠組みを作っているが、韓国語文法研究の先行研究が不十分であり、その根拠づけについても質問があった。それに対しては、修士論文段階から先行研究を調べ、日韓両言語を扱うに当たり最も適切な文献を選出しているという説明があった。論文内の記述にさらなる説明があったほうがいいが、自らの考えはしっかりと述べられていた。

外国語である日本語で研究を説明し、質問にもしっかりと答えていて、研究を行う日本語能力は十分にあると確認できた。また、自らの考えをひるむことなく述べる態度は、今後研究を続けていく力を十分に示すものであった。

以上、研究の目的とデータ収集、分析・考察から結論に至るまで、韓国人日本語学習者が指示詞を習得する過程を多角的、実証的に明らかにできている点は高く評価できる。一方で、論文の表現が不十分で読者を十分に説得し切れていない箇所が見受けられるという問題もある。全体的には、自立した研究者としてのスタートラインに立てるレベルには達していると判断できる。よって、博士号の学位を授与するに値する論文であると判断できる。

以上